

# つぎつぎ vol.3

雁木町家のある高田をつなぐマガジン

つぎつぎ 雁木町家のある高田をつなぐマガジン



雁木町家で働く人々

# つなぐ

起業 承継



(有)ケ-ア設備 小林 正 さん

雁木通りの水道屋さん

北本町1丁目の踏切を渡ると、突き当りのお寺まで両側に雁木が続く。ケ-アイ設備の小林正さんは、雁木通りの一画で仕事仲間と建築設備工事業を始めて26年。8年前に現在地に社屋を移転して、息子の直哉さんが社長を継いだ。昨年からは孫の陸さんが加わり、総勢6人のオフィスには炬燵のある休憩室もある。自宅までは徒歩数分。雁木通りの旧職人町は、仕事と日常が重なっている。

雁木町家の特徴は？

正さん 「とにかく町家は細長い。水とガスの配管は天井裏や床下を通り、裏口で階もつながるし、血管のように生活に不可欠なものだから、責任は大きい。漏水や故障の時は駆けつけてまず応急手当で、不具合の原因を突き止めて修理しますね」。

特に蛇口の水滴れやガス漏れ、排水管の詰まりには、日常の注意が大切。冬は給湯機の配管凍結や漏水の危険が高く、お隣さんが気づいて連絡してくれたこともあったという。

町家暮らしの「よかった」困った「よかったです」

正さん 「私は糸魚川の筒石生まれなので、細長い町家には慣れている。日頃から隣近所と親しくして、お互いに認め合う関係を大事に。趣味はジャズサックスの演奏だけど、町家は音が抜けるので注意しています」。

直哉さん 「今は町家に住んでないけれど、自宅とは別に何かに使えるような場所になると面白い。まちなかで車なしで歩いて暮らせるのは便利だと思いますね」。

陸さん 「町家に住みたいかと言われるとわからない。でも、雁木は子供時代の通学路で、あたり前の風景だった。なくなるのが寂しい」。

事業の引継ぎは、どのくらい？

直哉さん 「同業の会社に勤めていましたが、父の病氣もあって引き受けました。この仕事は会社も個人も様々な資格が必要になります。自分はその前に取得していたので、それも有利でした」。

陸さん 「目下、仕事の資格を取るために見習い中です」。



雁木の下三世代

雁木町家がひそかに人気？

昭和の時代、人口が増加して人々は市街地に集中しました。そこでは様々な商売が成り立ち、事業を始めやすい時代でもありました。現在は郊外の宅地開発と少子化で、人の流れは今後も変わるでしょうが、まちなかの雑多な魅力は生き残っているように感じます。時間をかけて成熟してきたまちには「新規参入」を受け入れる寛容の精神と、事業の大小を問わず「自分のやり方」を試すゆとりもある。そんな場所ではないでしょうか。

編集メンバー紹介

川田光 Hot Spot / HoBARU

雁木町家の活用の仕方も十人十色。固定概念にとらわれず、自分のやりたいことができる場所だと取材を通して感じました。

齋藤菜摘 Hot Spot / CASUAL DAYS  
町家でなくてもよかった、と始めたお店。そうだったお店が雁木のまちにどうしてなくてはならない景色になっていく。町家にはそんな可能性があるのでないでしょうか。

笹川千佳 表紙・雁木町家の時代 写真  
Hot Spot / Map  
昔の趣を残した町家もリノベーションした町家もそれぞれ良さがあり、不揃いの雁木のように、集まった一つの景色に魅力を感じます。

野口明子 雁木町家の時代  
ランドセルを背負い、友人と雁木通りを歩いていたことが、ついこの間の「このように思い出されます。このあたたかな雁木のまちが、百年先も受け継がれていきますように」。

日浅智恵 今昔のつぎつぎ物語

雪の日も外で遊べるし便利だと思っていた小学生時代。日当たりの良い家に住みたいと思っていた高校生時代。結局わが子も、この雁木町家で育った。これからどうなるのかな。

朝倉洵平 Hot Spot / Map

関由有子 <つぎつぎ>



雁木町家のある高田をつなぐマガジン

この冊子は(一社)北陸地域づくり協会の研究活動助成を受けて発行したものです。  
発行日：2024年2月26日  
発行者：関 由有子  
発行元：一般社団法人 雁木のまち再生  
ganginomachisaisei@gmail.com

新潟県上越市高田の市街地には「雁木のある町家」が立ち並んでいます。平野部にありながら多雪の地は、震災や大火をくぐり抜けて、今日も雁木でつながる暮らしを受け継いでいます。しかし、進学や就職を機に、若者は雁木のまちを離れてきました。親世代の高齢化は進み、空き家と空き地は、この先も増えていくでしょう。一方、雁木のまちの住みやすさだけでなく、その使いやすさに気づいて、それぞれの暮らしと営みを見つけて出す人々がいます。途切れながらも長く連なる雁木のように、その想いと試みが、この先へ繋がることを願っています。

一般社団法人 雁木のまち再生

お願い

お手元のこの冊子を別居のご家族や上越を離れたご友人等にお送りいただき、雁木のまち高田の未来に想いを致す人の輪を広げていただければ幸いです。





### 空き家を相続した。どうしよう！

雁木のまち再生 理事 岩野 秀人

両親が亡くなり、空き家となった実家の相談が増えています。考えられる対応としては、①取り壊す、②相続して売る、③相続して貸す、④相続しない(相続放棄)といった方向が考えられます。

それぞれの家族の事情を考慮して判断せざるを得ませんが、①の取り壊すにはかなりの費用がかかり、空き地に固定資産税がかかり続けます。将来土地を利用する予定のある場合に向いています。②の方法が一番すっきりしますが、売り手が多く買い手が少ないために希望の価格では売れない時代です。③も借手を探すのに苦労する上に補修は貸主の責任であるため、問題解決の先延ばしに過ぎないかも知れません。④の方法は他の遺産も相続できないため、不動産以外に預貯金などがほとんどない場合に限定されて、その後もやっかいな問題を抱え込む可能性がありますので、あまりお勧めはできません。

令和5年4月から、「相続土地国庫帰属制度」が創設されましたが、建物があると利用できず、土地だけの場合でもハードルの高い制度になっていて、利用できる事例はかなり限定されてしまいます。

空き家は、今後ますます増加することが確実です。百年先を見越して新しい宅地造成は制限し、中心市街地に住宅を誘導するような政策をより強化する必要があるように思います。



青田川を灯りで飾った夕べ



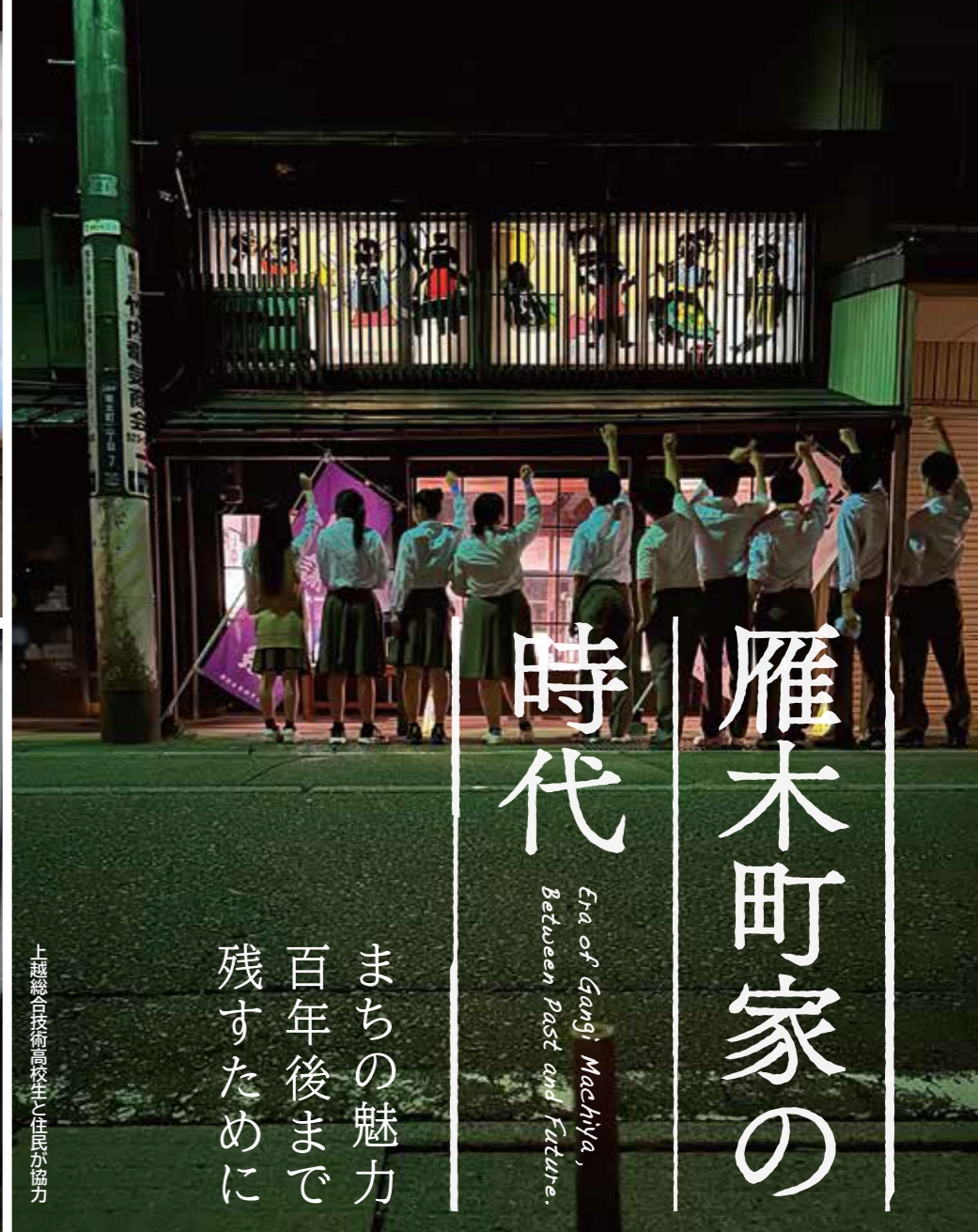
「昭和の部屋」



上越市消防第一分団もまちを支える



鉛屋さん前の雁木と石畳



# 雁木町家の時代

*Era of Gangi Machiya,  
Between Past and Future.*

まちの魅力  
百年後まで  
残すために

上越総合芸術高校生と住民が協力

### Interview

Q: まちの変化を感じたのは、いつ頃ですか？

高橋: 普段の生活に必要なものはそれなりに間に合っていました。大きく変わり始めたのは20年ほど前ですね。

石川: 以前は100軒以上のお店があったのに、まず魚屋さんや履物屋さんなどの商売が厳しくなり、その後もどんどん減って、うちも酒屋ですが、個人事業で自分の子供に継承しようという方は少ないのでは。今後も商店が消えていくという流れは、なかなか止められないですね。

Q: 竹内さんのお隣の町家を購入したきっかけと、その活用の経過は？

竹内: 10年前に、家主さんが郊外に住宅を新



← 石川さんと竹内さん(高橋鉛屋さん前にて)

Q: 雁木の街なみを受け継いでいくためには？

石川: 誰かここで商売をしたいという方があれば、継承することは可能でしょう。他所からも人が入りやすい制度や仕組みを整えて魅力的なまちをつくり、そこへ色々な人が来てくれるようにしてまちを残すことができるか？ そのためには、まちが魅力的でなければなりません。

商売を営む方々の他に、一般の方々が住まれてこそ、街なみが成り立ちます。20軒に1軒の間隔で商店があっても、住んでいる人々が出てしまえば、雁木の街なみというのは残らないですね。まち全体としての大きなビジョンを作っていく必要があると考えます。

高橋: 誰でも気軽に集える店があり、たとえば、日によって使い方が変わる町家というのも面白いかもしれません。竹内さんのように、雁木通りを歩く人々が楽しめるように飾るのも、その一歩で非常に良い試みだと思います。

築するので隣家を買わないか、という話があった購入しました。初めの5年間は町内有志にミセとチャノマの2室を貸して、毎週の野菜販売や出前を取ってお酒を飲んだりしましたね。その後はマンガ本を置いて、学校帰りの小学生が気軽に立ち寄れる場づくりを考えました。

そこで、床下に眠っていた古いオーディオ機器を置いて、他のレトロな品物も並べて飾り始めると、近所の方もそろばんなどの古い品々を持ってこられて、今のようになりました。『昭和の部屋』と呼ぶ方もいらっしゃいますね。

一軒の古い町家から  
かつて、百軒以上の商店が軒を連ねていた南本町三丁目。現在は、雁木通りとしての一体感を目を見張るものがある一方で、その数も連続性も年々減少傾向にある。住民として『まちの変化』を感じはじめたのは二十年前。十年前にはさらに現況に近くなり、商売を継ぐ人が減るにつれて、空き家の増加が目立ってきた。  
現在、昔ながらの雁木町家は数えるほどしか残っていない。その一軒を十年前に購入したのは、お隣で竹内電気商会を営む竹内一敏さんだ。竹内さんの先代が、隣接する町家の店先を借りて電気工事業を創業したのは昭和三十五年のこと。当時は主要街道筋の商人町に様々な業種の店が入りやすく、それもこの町家を選んだ理由のひとつだった。  
その後、古いままの雁木町家を活用するために読書スペース、町内の集会や野菜販売など、竹内さんご夫妻は『価値を共有できる場』を工夫して来られた。懐かしい品々が飾られている現在の店先は、一瞬でその世界観に浸ってしまうほどに美しい。静かな夕暮れ時、雁木の下で温かな光に包まれると、これからお芝居が始まるようで、自然と歩みが止まる。住居とは違う使い方だからこそ演出できる世界かもしれない。  
このまちが残るには  
南本町三丁目には、創業四百年近い鉛屋さんや四代続く酒屋さんのように、ご商売を続けながら今日までこのまちにお住まいの方々、電気屋さんのように使い手が入れ替わりながら、事業の場として継承される方もいらっしゃる。これまでも、雁木町家は様々な形で「つぎつぎ」と受け継がれてきた。近年、上越市はこの町内をモデルとして協働のまちづくりに取り組みはじめている。上越総合技術高校の生徒も積極的に参加し、通りに面して木格子を設置したり、外観の色調を揃えたりする景観啓発の活動を続ける中で、住民のまとまりと一体感が生まれてきた。雁木通りだけではなく、長く続く「青田川を愛する会」の活動も大きな成果を残しているといえる。  
『雁木通りという街なみを百年残すことができれば、百年後にそこに魅力を感じる人々が出てきてくれるだろう。数年単位の短期目標ではなく、まちの将来を見据えたビジョンを描くことが重要だ。』  
何百年も受け継がれてきたまちを丁寧に丁寧に育てていく。そのきっかけとして、この地に残されている『ほんものの雁木町家』が、地域の人々や外から訪れる方々にとって『また足を運んでみたい』と感じる場所に出来るかが、大切な鍵を握っているように感じた。

この物語は二〇一九年の年末に、戸野目の旧街道沿いにある元靴製造業の古い空き家を発見したことから始まります。「こうじゃ」と名付けて、古い着物と道具の展示公開を始めました。少しずつ手直ししながら、アートや音楽など表現の世界へ展開しています。

現在は、お隣の四ヶ所地区の「あるや」二階を、季村江里香さんのミニギャラリーとして整備しています。



山形市出身。古民家暮らしの拠点として上越市に移住し、多くの民家を再生中。  
instagram.com/gangipatope/

ジャズ喫茶あるや店主 北折佳司さん

## 懐かしさの中に、未来がある

**関川** 東岸の稲田から、緩やかに曲がる細い道に沿う雁木通りは、国道18号の高架をくぐって四ヶ所、戸野目へ続きます。昔から変わらないその風景の中、かつての「靴屋」がアートギャラリーとして使われています。古い家の空気が満ちて、昔のままの町家それ自体が作品になっているようで、新たに開く人たちも増えています。

今後も様々な企画を発信していきますので、是非来ていただき、この雁木通りを散歩してみるのはいかがでしょうか。雁木の下は私有地です。お住まいの方やすれ違ふ方とさり気ないコミュニケーションも大切にしましょう。

## とある町家の今昔つぎつぎ物語

明治中期頃築  
口上越市戸野目

旧宮崎靴店

▼ ギャラリー「こうじゃ」



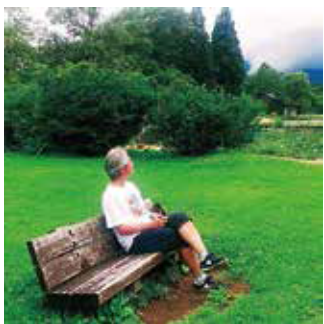
美楽展

2023年11月

# こうじゃ

## 外観は地味、中に入るとなぜか不思議な「臨場感」

美楽展制作 石田賢一郎さん

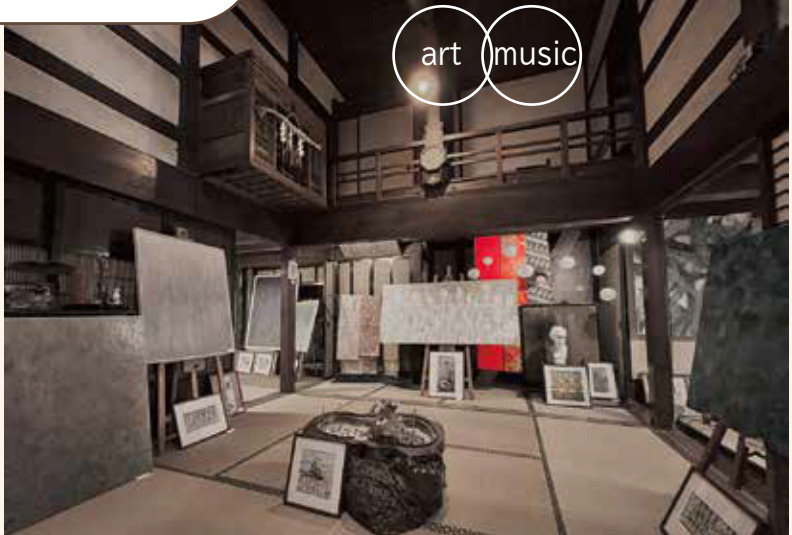


上越市出身。サラリーマン生活の傍ら制作を続け、退職後も発表している。  
instagram.com/kenichiro099

ワタシは自分の作品達がどのようなカテゴリーに分類されるのかには興味はありませんが、自分の過ちしてきた時代や、その中で体験したり、感じたりしたことを「カタチのない世界」として表現したいと考えています。自分の作ったものを置くだけじゃなく場所に合わせてアレンジする。自分の作品で遊ぶ。「こうじゃ」を見てからアレンジし、全然違う作品になったものもあります。日々刻々、光の入り方が違ふ。毎日時間を変えて通い、作品をずらしたり、色を入れたりして。天井の高いチャノマを見て、ワタシも最初は「何か吊るしたい」って思ったんだけど、吊るしちゃうと明かりが変わっちゃうんですよ。こは立体感、上まで抜けている感じがいい。観に来る方は、街なみや骨董など

色々なことに関心のある方が多くて。質問されても分からないと「私は分かりません」という。そうすると色々教えてくれる。ある程度会話をして、何となくお互いの呼吸というか、そこで初めて会話になる。

それは、この町家がそうしてくれるわけですよ。私もこの町家に惹かれてやっているわけで。



art music

「住む」「営む」という日常生活を長く担ってきた一軒の雁木町家は、その役割を終えていきました。しかし、今「芸術」を通して非日常を表現し細長く高く伸びる空間に天窓からそそぐ光と生まれる影。そこに音を加えた空気感を体験する試みがあります。

## くらのシルエット展

2021年9月 photo



生活や仕事の場として、雁木のまち高田を選ぶ若い人々も、少しずつ現れ始めています。彼らのまなざしと明治町家の光と影が織りなす「雁木のまち高田を体感する」というコンセプトで写真展を開催しました。「アート」による空き家活用の事例は多くあります。今後、広がっていくには若い世代の感性が大きな比重を占めていくでしょう。



「美楽展」蔵の音楽ライブ  
Duo : le populus  
イガラシマサト (gt) & aco (cl)

## 音楽の力で蔵をよみがえらせた。

80年代生まれの私は、地元の戸野目に生まれ育ち、今でも住んでいるが、「こうじゃ」のことは知らなかった。初めて入った時の印象は「野性的」。きれいにしすぎてないところがいい。

「美楽展」では、昔の姿を残す「こうじゃ」に溶け込ませる作品に合うようなジャズを楽曲し、流してもらった。今後も町家でのイベントを通して、少しでも雁木通りや町家の良さを感じてもらえれば嬉しいです。(Hirofumiさん)



北折さんと美楽展 BGM 選曲の Hirofumi さん

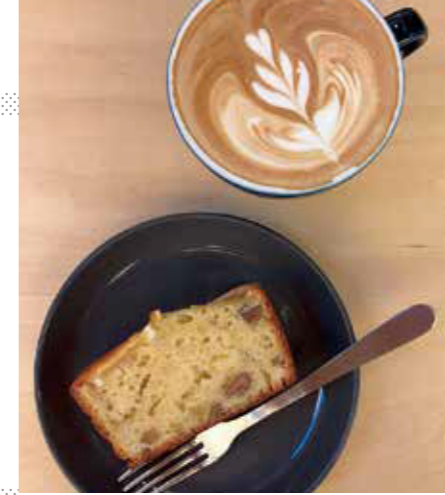
「こうじゃ」は新しいと思った。なぜならそれは古すぎるから。



上越市出身。2019年に糸魚川の自宅をリフォームしてベーグル店「HÖBARÜ」を開業。上越から糸魚川に通うお客さんも増え、2023年5月に高田の雁木通りの一画に念願の2号店をオープン。

**HÖBARÜ**  
ホオバル  
おの ゆきこ  
**大野 友規子**さん

— あ の ひ と こ の 場 所 —  
feature!  
**雁木町家 Hot Spot**



**COFFEE AND SANDWICH CASUAL DAYS**  
さいとう なおき  
**齋藤 直樹**さん

神奈川県出身。パン職人としてキャリアをスタートして、東京や軽井沢のベーカリーカフェで経験を重ねた。2021年に上越に移住、カフェのオープンに向けた準備を進めて2023年9月にオープン。



**ベーグル専門店を始めたきっかけは？**  
以前、カフェの手伝いをしていてる時に一番人気があったのがベーグルでした。また、自分の子ども達に安心安全な材料を使ったパンを食べさせようとして作り始めたのもベーグル。お店で販売しているベーグルも自家製酵母と国産小麦粉を使い、身体に優しい素材を使うことにこだわっています。

**なぜ「雁木町家」にお店を開くことに？**  
最初から雁木町家にお店をという訳ではなかったのですが、物件を探している中で紹介されたこの町家に出会って、一目で気に入ってリノベーションを行いました。店内は絵本のベーグルの世界を表現しています。

上越店のオープン時には、開店前から行列ができ、整理券を配ってすぐに売切れになっていました。男女を問わず、幅広い年代のお客さんが足を運ぶ人気店です。代表の大野友規子さんにお話を聞きました。

**今後の展望を聞かせてください。**  
ベーグルを使ったカフェメニューやキッチンカーなど、外でも温かいベーグルサンドを提供したり、店舗では、自家製酵母を使用した焼き菓子やスイーツなども考えています。  
「ベーグルを口いっぱいにはおぼって笑顔になってもらいたい」これからも心を込めてベーグルを作っていきます。

**お店の特長を教えてください。**  
ベーグルは組み合わせが無制限で、店内には毎日40種類以上のベーグルが並びます。  
旬の美味しい食材を使った商品を作りたいという思いから、毎月限定のメニューもあり、それを目当てに来られるお客さんも多いです。  
お店に来られない遠方の人達にも食べてもらいたいということで、毎月のベーグルをセットにした「ベーグル便」の通販を行っています。冷凍便で北海道から沖縄まで、全国各地から注文があります。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。

「雁木町家」でお店を始めた経緯は、東京や軽井沢で勤務をしていましたが、毎日が忙しく、会社勤めに負担を感じて、妻の故郷である上越に移住することを決めました。移住後は自分の生活スタイルに合わせて仕事をしたいと考えて、自分の店を持つ決断をしました。知人を通して雁木町家を再生する方と繋がり、いくつか紹介いただいた物件のひとつがこの町家です。



住所：新潟県上越市北本町1-2-2  
時間：11:00-17:00(売り切れ時は終了)  
定休：水、日曜日(変更はInstagramに)  
電話：025-520-7751  
駐車場：7台(店舗とセブンイレブン前)  
Instagram @hobaru.joetsu

**【取材して……】**  
ベーグルというシンプルなパンをイメージしますが、ホオバルのベーグルには溢れんばかりの食材がサンドしてあり、とてもボリュームがあります。しかも種類が多くて、目移りしてしまいます。月が変われば違った種類のベーグルが並んでいて、どれにしようかと悩む楽しさがあり、何度も足を運ぶくなるお店です。  
材料や食材にこだわって作っていることで、安心して自分の子ども達にも食べさせられます。大野さんのベーグルに対する熱意やアイディアの多さに感服。ぜひ、大野さんのベーグルを多くの人に食べてもらいたいです。



雁木通りから儀明川と青田川沿いを散歩したり、高田小町で一休み。高田世界館で映画を見たり、雁木通りのお店や朝市、春秋のオープンガーデンも様々です。雁木から高田城址公園まで足を延ばして、ピクニックランチも楽しいでしょう。

「大町通りの朝市」 © ひぐちキミヨ



つぎつぎ vol.3  
掲載マップへ

**【取材して……】**  
年末年始も休むことなく、齋藤さんにとって、お店を開けることは仕事というよりも日常であるように、とても自然な姿で働いていらっしゃるのを感じました。多忙な生活を離れて上越へ移住されたことで、求めている新しい働き方やライフスタイルを体現されているのだと思います。また取材では「ここにあること」「開けていること」という言葉がとても印象に残っています。  
元旦に起きた地震や事故を受け、当たり前のことや普通の毎日がそうではなくなった今、その言葉の意味をより重く受け止めています。



住所：新潟県上越市大町5-1-6  
時間：8:00-18:00(冬季は17:00まで)  
定休：火曜日(変更はInstagramに掲載)  
電話：080-9993-1587  
車の方は近隣の有料駐車場をご利用ください  
Instagram @casual.days